

本誌は、県民の皆様に山梨県子ども読書支援センターのことをより深く知っていただくため、当センターの事業や活動内容について情報発信するものです。

>>5～6月の子ども読書支援センター事業関連の問い合わせ件数と職場見学の件数

5月～6月に窓口または電話等で問い合わせのあった件数は次の通りです。

合計 75 件（内訳…5月:28 件、6月:47 件）

また、職場見学は 22 件ありました。

>>子ども読書支援用品の貸出について

パネルシアターやエプロンシアター、てぶくろ人形等、団体*向けの「子ども読書支援用品」の貸出を始めました。保育所やボランティア活動での読み聞かせ等に、ぜひご利用ください。ご利用の際は、団体登録をした上で児童カウンターにて貸出の申込をしてください。上演に必要な機材も、資料とセットで貸出できます。

資料リストは当センターホームページからご覧いただけます。

(http://www.lib.pref.yamanashi.jp/kodomo_shien/shien_list.html)

貸出点数:1つの団体につき1種類1点まで

貸出期間:30 日間まで(延長不可)

予約:1種類1点まで

(直接来館または電話で受け付けます。在庫の用品の取り置きはいたしません。)

*県内で活動する子どもの読書関係 NPO・ボランティア団体、子育て支援センター、幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校等が対象です。



↑左から時計回りに、てぶくろ人形、パネルシアター、エプロンシアター

>>平成 22 年度～平成 24 年度「子どもの読書活動指導者養成講座」報告(1)

過去3年間に実施した研修の概要を、3回にわたって報告していきます。

県内の子どもの読書活動に携わる方を対象に、指導者的役割を担う人材を育成するため、平成 22 年度から3ヵ年計画で、1年目は子どもへの読み聞かせ・おはなし等を実践するボランティア活動の経験者、2年目は図書館職員、3年目は幼稚園・保育園等職員を研修対象とし、読書活動の専門知識及び実技を学ぶ研修を実施しました。

平成 22 年度 講座内容

【第 1 回】

日時:平成 22 年9月 21 日(火) 午後1時～午後4時 場所:びゅあ総合 参加者:39 名

第1回の講義に先立ち、開講式を行った。山梨県立図書館企画調査課長の挨拶と講座オリエンテーション、担当職員の紹介があった。

講義「子どもの読書と子ども読書支援センターのめざすもの」清水澄 山梨県立図書館長(当時)

第一に、子ども読書支援のこれまでの経緯等、第二に、子ども読書支援センターがめざすもの、第三に、これからの読書支援活動について話した。

まずこれまでの経緯について。平成 9 年の学校図書館法改正から平成 18 年の図書館法改正までを振り返り、学校図書館や読書の重要性が見直されたことを挙げた。「子どもの読書活動に推進に関する基本的な計画」(第一次)の成果と課題、そして第二次計画の骨格について説明した。また、子ども

達の現状、読解力の捉え方の変化や新学習指導要領についても説明があった。教育論や読書調査を背景にしたクリティカルな読み方、読書体験を人と語り合うことの大切さについてもお話があった。

続いて、子ども読書支援センターの目的について。教育基本法第3条にある「人格を磨き豊かな人生を送る」ための学習を支援し、学校活動を支援する。新図書館は県民との交流を通して発展していく場を目指しているというお話だった。

最後に、今後の読書支援活動について。「新しい公共」という考え方を挙げつつ、「本を元にしたコミュニケーションを進めてほしい」と締めくくった。

質疑応答では、PISA(Programme for International Student Assessment)とは何か、読書を通じたコミュニケーションと PISA の関係等について質問があった。

【第 2 回】

日時:平成 22 年 10 月 8 日(金) 午後1時～午後4時 場所:びゅあ総合 参加者:42 名

講義「ことばの種をまく ―0歳からの読み聞かせ―」金澤和子氏(横浜市・はぐはぐの樹子ども図書館館長)

第一に乳幼児の読書環境について、第二に絵本の読み聞かせについて、第三におはなし会の実際について講義をしていただいた。

まず、乳幼児の読書環境についてブックスタートの広がりや未就園児のおはなし会の増加等改善が見られること、家庭とおはなし会の読み聞かせの役割が違うこと、現在おはなし会には多機能性が求められているというお話があった。

次に、絵本の読み聞かせから育つものについて。絵本は言葉を通じたコミュニケーションであり、読み聞かせを積み重ねることが大事だという。赤ちゃんの研究から色々分かってきたことを挙げ、子どもの発達と絵本の関係、赤ちゃんの知覚の特徴を踏まえた読み方について、絵本の例を示しながら説明された。

絵本の選び方や読み方等、実践については、子どもの年齢に即しているか、遠目がきくか、同じような本ばかりになっていないか気をつけて本を選び、本の持ち方や立ち位置、声の出し方等に気をつけながら心を込めて読むということだった。

続いて受講生と共に手遊びやわらべうたを実践した。「おちゃをのみにきてください」「ぺったらぺったん」「うえからしたから」「にぎり ぱっちり」「だいこんつけ」「もどろもどろ」など。

おはなし会プログラムの組み方について、日程・会場・人数・テーマ・プログラム等の視点からお話があった。当日の人数や気候に合わせた細かな調整も必要であり、子どもは個人差があることを意識すること、読み聞かせを友人に確かめてもらうこと等を注意点として挙げられた。

最後に、「子どもの読書支援に関わる人は子どもと大人の媒介者であり、支援によって子どもの文化や言葉を育むことにもつながる。ことばの種を蒔き育てるに当たって、心を込めて取り組んでほしい」と締めくくられた。

参考/紹介資料:『のはらうた』1(くどうなおことのはらみんな作、童話屋、1984年)

『赤ちゃん絵本であそぼう!』(金澤和子編著、一声社、2009年)

『赤ちゃん絵本をひらいたら』(NPOブックスタート編著、岩波書店、2010年)

『絵本論』(瀬田貞二著、福音館書店、1985年)

『赤ちゃん脳科学』(小西行郎著、集英社、2003年)

『えほんのせかいこどものせかい』(松岡享子著、日本エディタースクール出版部、1987年)

『いないいないばあ』(松谷みよ子文、瀬田康男絵、童心社、1981年)

『ぶーぶーぶー』(こかせさちぶん、わきさかかつじえ、福音館書店、2007年)

『がたんごとんがたんごとん』(安西水丸さく、福音館書店、1987年)

『幼い子の文学』(瀬田貞二著、中央公論社、1980年)

『じゃあじゃあびりびり』(まついのりこさく、偕成社、2001年)

『もこもこ』(谷川俊太郎文、元永定正絵、文研出版、1977年)

『絵本が目をさますとき』(長谷川撰子著、福音館書店、2010年)

『幼児期』『子どもことば』『ことばと発達』(岡本夏木著、岩波書店)

『子どもはことばをからだで覚える』(正高信男著、中央公論新社、2001年)

『たまごのあかちゃん』(かんざわとしこぶん、やぎゆうげんいちろうえ、福音館書店、2009年)

『しょうぼうじどうしゃじぶた』(渡辺茂男文、山本忠敬絵、福音館書店、2007年)

『くだもの』(平山和子文・絵、福音館書店、1981年)

質疑応答では、おはなし会での子どもの対処等について質問が出された。



←視察した東久留米市東部図書館

【第3回】(視察)

日時:平成22年10月17日(日)

午前7時30分~午後5時30分

視察先:科学の本の読み聞かせの会ほんとはんと(東京都東久留米市東部図書館)

参加者:20名

バスで東京へ向かい、おはなし会の様子を見学させていただきました。その後、科学の本について講義していただいた。

見学「よう!あそぼう!かがくの本」10月テーマ「月をみよう」午前10時~正午(月1回45分)

当日のおはなし会は講師(国立天文台の方)とスタッフで運営。参加者は幼児から小学生の子ども22名。太陽・地球・月の3チームに分かれて月の満ち欠けの仕組みを体験し、『つき』(山田和著、福音館書店)を元に月のスケッチ。夜の月の観察も促す。その後、図書館職員による『月をみよう』(藤井旭著 あかね書房)の読み聞かせ、次の資料の紹介があった。

「ひるまのおつきさま」かがくのとも2010年10月号 福音館書店 『宇宙たんけんたい2月』(フランクリン・M.ブランリー文、的川泰宣日本語版監修、小峰書店、2005年)

『メグつきにいく』(ヘレン・ニコル著、ヤン・ピエンコフスキー絵、偕成社、2007年)

『なるほどナットク“自然現象”1 日食・月食・オーロラ』(学研、2009年)

『総合学習に役立つ宇宙と地球環境を考える本5 めざせ!宇宙にかかわる仕事』(偕成社、2002年)

『宇宙においてよ!』(野口聡一著、講談社、2008年)

最後に、紹介した本は借りられること、来月の日時等を知らせた。

使った資料や説明方法、子どもへの対応等について振り返る、スタッフの反省会を見学させていただきました。

講義「理科読で子どもの不思議心を育てる」土井美香子氏 午後1時~午後2時40分

まず、「理科読」について。読書にはわからないと楽しむことができない面があるので、読み方を大人が示すこと。科学の本の読み聞かせや調べる過程を通して、どう読んだら面白いのか、どんな読み方があるのかを知ることが理科読だった。

次に、学校と図書館、科学館はそれぞれ目的が違うことから、図書館と取り組む意味について述べられた。図書館は自由

に利用できるので、自分で取り組んで面白さがわかる。科学とはどういうことか知るのに向いている。受講者は水の表面張力を利用した3つの実験を体験した。

おはなし会は、テーマ、本、実験で何をするか、成果物を何にするか等を考えて決めるという。年間計画を立てて実施しており、自分たちの学習会も開催している。図書館は会場確保、記録、保険加入を担当。材料費、交通費、機材等の負担は図書館と会ですり合わせる。図書館で募集をかけ、研修を行ったり他の人の実践を見たりして人材育成も行っているとのことだった。

参考／紹介資料『理科読をはじめよう』(NPO ガリレオ工房、岩波書店)
『だいこんだんめんれんこんざんねん』(加古里子作、福音館書店、2010年)
『おやおや、おやさい』(石津ちひろ文、山村浩二絵、福音館書店、2010年)
「おしのかきはなぜあかい」『おそばのくきはなぜあかい』(石井桃子文、初山滋え、岩波書店、1980年)
『みずたまレンズ』(今森光彦さく、福音館書店、2008年)
「まほうのコップ」ちいさなかがくのとも 2008年7月号、福音館書店
質疑応答では、選書方法、広報、科学の本のおはなし会の意義、図書館とのやりとり等について質問が出た。

【第4回】

日時:平成22年11月10日(水) 午後1時～午後4時
場所:ぴゅあ総合 参加人数:38名

講義「昔ばなし絵本の選び方」伊藤明美氏(浦安市立中央図書館)

出版されている様々な絵本から子どもに責任を持って選ぶためにどうすればいいか、お話しいただいた。第1に昔話とは何か、第2にその構造、第3に絵本の比較を通して昔話絵本を考え、最後に「良い絵本」とは何か。

まず、昔話について。作者がいる創作や神様のことを語る神話、場所や時を特定し本当にあったこととして語る伝説と昔話の違いについての説明の後、昔話の特徴について語りの実演を交えて説明された。本来昔話は語りを耳で聴くもので、「むかしむかし」等の発端句で始まり「いちごさけた」等の結末句で終わる他、「3回の繰り返し」「極端性」等の特徴がある。子どもが昔話を好きな理由や終わり方のパターンについても触れられた。

次に、昔話の構造分析について。世界に昔話は色々あるが似た図式を持っているという、アラン・ダンダス(アメリカの研究者)の考え方についてお話があった。物語は欠如から充足に至る構造を持っており、世界中の昔話を単純化すると、人間が生きる上で一番望んでいるもの、普遍的に次世代に伝えていきたいと思うことが見えてくるという。

それから、昔話絵本について。「昔話とは何か」を頭に入れて絵本を選んでほしいということだった。『三びきのこぶた』『おおかみと七ひきのこやぎ』『赤ずきん』を使った絵本の比較、グループ協議を行った。元の話に忠実か、彼岸の物をどう描いているか等が判断のポイントになる。再話者や挿絵画家による工夫についても説明があった。昔話を絵本にする時に失われるものがある一方、絵は未知の風土・民俗を知る手がかりになるので絵本にしない方が良いということではないが、変な絵本を見せるよりはきちんと再話された昔話集を読んでやり、耳から入ったことを想像できるようにさせたいということだった。

最後に、良い昔話絵本とは何か、絵本の例を挙げながら、絵本ならではの特性を活かしているか、絵や文章の質はどうか、風土・民俗に理解があるか、シリーズでなく一冊の本としてどうかといった要点を説明された。「子どもの心に何十年も後まで残る本なので、普段読んでいる本をもう1度確認して、子どもたちに聞かせるべきか考えてほしい」と締めくくられた。

参考／紹介資料:『昔話入門』(小澤俊夫著、ぎょうせい、1997年)
『三びきのやぎのがらがらどん』(マーシャ・ブラウンえ、せたいじやく、福音館書店、1965年)
『絵本論』(瀬田貞二著、福音館書店、1985年)
『昔話絵本を考える』(松岡享子著、日本エディタースクール出版部、1985年)
『三びきのこぶた』(ジェイコブズ作、鈴木佐知子訳、小野かおる絵、福音館書店、1978年)
『おおかみと七ひきのこやぎ』(グリム[原作]、フェリクス・ホフマンえ、せたいじやく、福音館書店、1967年)
『ちいさなりょうしタギカーク』(V.グロツェル、G.スネギリョフ再話、松谷さやか文、高頭祥八画、福音館書店、1997年)
『こかげにごろり』(金森襄作再話、チャン・スクヒャン画、福音館書店、2005年)
『おおきなかぶ』(A.トルストイ再話、内田莉沙子訳、佐藤忠良画、福音館書店、2007年)
『まのいりょうし』(瀬田貞二再話、赤羽末吉画、福音館書店、1975年)
『ねむりひめ』(グリム兄弟原作、フェリクス・ホフマンえ、せたいじやく、福音館書店、1978年)
『あかりの花』(肖甘牛採話、君島久子再話、赤羽末吉画、福音館書店、1985年) など
質疑応答では、昔話を紹介する時の方法や、絵から受ける印象と良し悪しの判断の関係について質問が出た。

【第5回】

日時:平成22年9月21日(火) 午後1時半～午後4時半
場所:ぴゅあ総合 参加者:60名

講義「読書ボランティアを続けるために」草谷桂子氏(静岡市の図書館をよくする会、トモエ文庫主宰)

はじめに家庭と公の場の読み語りの違いについて、次に子どもの読書傾向、そしてボランティアをする上での留意点についてお話があった。

公の場での読み語りは責任があるので選書に注意し、本を手取るなどの行動に結びつくよう方向付けをするのが望ましいということだった。

ボランティアの心得として、技術や選書眼を磨くこと、絵本と子どもが主人公だと意識して活動することなどを挙げられた。また、ボランティアの責任についてもお話しされた。

「ボランティアとは自発的に自分たちに何ができるか考えてすること。本を読むだけでなく、今の社会的背景を知ること重要」ということだった。

参考資料『読書ボランティア-活動ガイド-』(広瀬恒子著、一声社、2008年)

講演の後、第1回～4回講座の報告に続いて受講者による意見交換会が行われた。「これからも地域で頑張りたい」「簡単に子どもの前で読んではいけなさと感じた」といった感想の他、当館の研修会に対するご意見をいただいた。

最後に閉講式を行い、講座の8割以上に出席された29名の方に修了証を授与した。

次回は、平成23年度の概要を報告します。